シカゴ日本人学校における特色ある教育活動及び アメリカ現地校視察について

前シカゴ双葉会日本語学校全日校シカゴ日本人学校　教頭
高知県高知市立介良小学校　教頭　今　西　和　江

キーワード：国際理解教育、英語教育、現地校との交流学習、現地校視察、アメリカの教育

1．はじめに

シカゴ日本人学校（現地名：シカゴ双葉会日本語学校全日校）は、ニューヨーク、ロスアンジェルスに次ぐアメリカ第３の都市、シカゴの郊外に位置している。シカゴは人口約270万人、イリノイ州の北東部に位置するアメリカ中西部最大の都市であり、ダウンタウンには高層建築が立ち並び、有名な建築家による美しい摩天楼がそびえ立つ大都市である。また、五大湖の一つであるミシガン湖の南西に面し、四季はあるものの春・夏・秋は比較的短く、冬は長くて寒さが厳しく氷点下を記録する日々が続く。

シカゴ日本人学校は、昭和53年９月に開校し、その後、関係者の努力により現在まで長い歴史と伝統を築いてきた。私が勤務していた2014年度には開校36周年を迎え、４月現在の在籍数は約230名。幼稚部から小学部、中学部まで幅広い年齢層の子どもたちが在籍し、充実した学校生活を送っている。

2．シカゴ日本人学校の特色ある教育活動

(1) 充実した英語教育

本校では、児童生徒の国際性を豊かにするため、英語教育の充実に努めている。日本国内の教育課程に準拠しながら、アメリカのESL（English as a Second Language）教育（※）を取り入れた本校独自の英語プログラム「シカゴ方式」を開発・実践している。‘Open. Fun. Effective.’「みんな分かる。やる気になる。力がつく」をモットーに、ネイティブ教員と日本人教員が一貫したカリキュラムを作成し、確かな４技能（聞く・話す・読む・書く）の育成を目指した指導を行っている。

保護者の中には、日本から来たばかりで我が子の英語学習に期待と不安を抱いている家庭や、帰国を視野に入れて現地校から本校へ編入し、身に付けた英語力を保持したいという考えを持つ保護者など、本校では英語学習に対する保護者のニーズは多岐にわたっている。そのため、習熟度別にクラス編成を行い、子ども一人ひとりに合った学習内容を提供できるようにしている。また、授業はESL教育の経験があるネイティブ教員が、原則全て英語で行っている（入門クラスでは、子どもたちの実態に合わせて、バイリンガルで授業を行う場合がある）。

小学部では、低学年１・２年生、中学年３・４年生、高学年５・６年生でそれぞれ合同学年を組み、入門E→初級B→初級HB→中級I→上級Aという５つのコースを開講しており、「英語の時間」と呼び、週４時間実施している。

中学部では、日本人教員による英語Ⅰとネイティブ教員による英語Ⅱを開講。週５時間実施している。英語Ⅰでは２段階（レギュラーRとスーパーS）、英語Ⅱでは３段階のコース（中１の場合は、入門E→初級B→上級A）があり、英語初心者の生徒でも中学３年間で英検準２級合格、現地校出身の生徒では英検準１級合格という高い目標を目指して取り組んでいる。小学部中学部とも１クラス当たりの平均人数は5~15人程度となっている。

このように、本校では個々の子どもたちの能力に応じた授業が行われ、その結果、児童生徒の英語力は確実に身に付いている。小学生の段階から英語検定に積極的に挑戦する子どもも少なくない。また、幼稚部でも英語遊びの活動を行っており、小学校入学前から英語への興味や関心を育んでいる。

これから国際社会に羽ばたいていく子どもたちにとって英語力は必要不可欠な能力であり、グローバル社会において、世界の人々と英語でコミュニケ-ションを図ることのできる子どもたちに育ってほしいと願っている。

そのための素地を本校の英語教育を通して培っていきたいと考えて取り組んでいる。

※　ESL 教育（ESL=English as a Second Language）とは「第 2 言語としての英語」という意味で、アメリカの現地校で英語を母語としない子どもたちが、少しでも早く授業を英語で受けられるようにと開発された、外国語としての英語習得プログラムのこと。

(2) アメリカ現地校との交流学習

本校では現地の教育委員会や学校の協力を得て、現地校との交流学習も盛んに行っている。小学部では年間 4 回程度（現地校訪問 2 回、現地校招待 2 回）、中学部は年間 2 回程度、アメリカ現地校の同学年のクラスとの交流学習を実施している。

〈2014 年度の交流学習相手校〉

学部	学年	交流相手校
小学部	1 年	Ivy Hill Elementary School
	2 年	Ivy Hill Elementary School
	3 年	Tripp Elementary School
	4 年	Dryden Elementary School
	5 年	Windsor School
	6 年	Everett Dirksen Elementary School
中学部	1~3 年	Thomas Middle School

現地校との交流学習の様子

交流学習では英語を使ってのゲームや遊びを通して現地校の子どもたちとのコミュニケーションを深めたり、日本やアメリカの文化を紹介し合ったり、英語や算数の授業を一緒に行ったり、ランチ一緒に食べたりと、活動には様々な工夫が凝らされている。日本の文化を楽しんでもらおうと習字や折り紙、浴衣体験、和太鼓演奏などを取り入れる学年もある。現地校の訪問は、アメリカの現地校の様子を肌で感じることができる貴重な体験である。

子どもたちは、こうした交流学習を通してアメリカの子どもたちとの交流を深めるとともに、もっと英語をしっかり勉強し、話せるようになって意思疎通を図りたいという思いを抱き、英語学習へのモチベーションを高める絶好の機会ともなっている。また、アメリカの文化や習慣に触れ、異文化理解を深める貴重な学習の場でもある。

3．現地校視察研修

シカゴ日本人学校が位置するアーリントンハイツ市にはいくつかの現地校があり、それぞれの学校区（School District）ごとに教育方針が設定されている。本校は 25 学校区に属しており、現地校は小学校 7 校と中学校 2 校がこの 25 学校区に所属している。本校に勤務中に、私は交流相手校を始め 5 つの現地校を訪問・視察する機会を得ることができた。現地校の授業参観や現地校の教職員との意見交換を通して研修を深めることができ、アメリカの教育事情の一端を知ることもできた。ここに現地校を訪問・視察して学んだことをまとめてみたい。

(1) 恵まれた教育環境

訪問したいずれの学校も教育環境が非常に充実していた。情報機器については、どの教室にも備え付けのプロジェクターやパソコンがあり、児童生徒一人ひとりには個人用の iPad が完備されていた。教員も児童生徒もこれらの視聴覚機器を積極的に活用して授業が行われていた。中には、教科書やノートは使わず、iPad だけを使って学習しているクラスも見られた。教師も児童生徒もこれらの機器に精通し、それらを効果的に活用する能力や技能を身に付けていることに驚かされた。恵まれた教育予算により教育環境が整備されていることがうかがい知れた。

(2) 充実した読書環境・専科教育

学校図書館の施設も大変充実していた。専門の図書館司書が複数名配置され、司書専用の部屋が図書館脇に設

けられていた。児童生徒が図書館で授業を行うときには、専門の司書が指導やアドバイス等を行っていた。図書館の壁面には、物語の登場人物の絵がまるで美術館のように色彩豊かに描かれていたり、目標の読破冊数を達成した児童の顔写真を掲示してその努力を讃えるコーナーが作られていたり、先生や友達のお勧めの本のコーナーが設けられているなど、日本と同様、読書教育や読書指導に力を入れていることが見て取れた。

中学校では体育施設を見学したが、体育館に併設してジムが設けられ、各種の運動器具が所狭しと並べられ、シカゴの長い冬場に戸外での運動が制限されるとはいえ、公立学校でもこれだけの充実した施設を備えていることに驚かされた。専門の体育指導教員が指導に当たっていることは言うまでもない。

(3) 個に応じた指導の充実

現地校での授業参観で興味深かったのが、習熟度別に分かれて指導しているクラスであった。その教室では5~6名の児童が教室の一角にあるテーブルを囲んで座り、担任の先生から一人ひとりの理解度に応じたきめ細かい指導を受けていた。聞くと、その時間に与えられた課題や宿題で課された内容について習熟が不十分な児童を取り出し、教員が一人ひとりの理解度を確かめながら指導を行っているということであった。

現地校の授業の様子

一方で、そのクラスでは十分に課題を理解している児童は、発展的な課題に向かって自学自習をしていた。iPadを使って次々に発展的な問題に挑戦している子、分厚い教科書で学習している子と様々であった。驚いたことは、全員がそれぞれの課題に集中して取り組んでいることであった。自由な雰囲気の中であっても友達と私語をしたりする子は誰一人おらず、学習規律が十分に身に付いていることが感じられた。

(4) 規律正しい学校生活

訪問した現地校を見る限り、日本よりも授業中の学習規律は厳しいように感じた。どの学級でも私語や悪ふざけ等は全く見られず、授業に集中して取り組んでいた。日本では決して見られない光景として、授業中（決められた時間)、学習しながら軽食を食べることが許されている。子どもたちが持参したスナック類をジップロックの袋から取り出し、食べながらノートを取ったり教科書を読んだりしている姿には驚いた。しかし、それで授業が乱されたり、私語が生じたりといったことは全くなく、あまりにも自然に行われていた。低学年から指導が徹底されていることが伺い知れた。スナックを食べたり、ジュースを飲みながらも、集中して学習し、黙々と課題をこなしていたが、現地校の先生と話をする中で、授業中の軽食には反対の意見を持つ教員もおり、ここでも全てに自己責任の国アメリカのお国柄を見ることができた。

また、授業中床に寝転んで読書をしたり、机に向かうのではなく床に座って練習問題に取り組んでいる児童もいた。真剣に学習に取り組んでいるのであれば、授業中の姿勢や態度にはこだわらないという考え方が伺われた。

授業中、廊下を移動するクラスとすれ違ったが、どの子も整列して無言で整然と移動していた。また、低学年のクラスでは授業の終わりに全員を並ばせトイレと特別教室に移動させていた。並んでトイレに行き、使用したい児童だけがトイレに入り、他の児童は廊下で静かに待つという指導の徹底ぶりには驚かされた。

ランチの時間に広い食堂で食事をとっている様子を見る機会もあったが、低学年の児童も静かに食事をしており、規律正しい学校生活を送っている姿を見ることができた。

(5) 充実した特別支援教育

今回訪問した学校のいくつかで、ハンディキャップのある子どもたちへの支援の様子を見る機会があった。アメリカでは、ハンディキャップのある子どもたちは21歳まで無償でその子に合ったケアを受けることができると法律で定められている。ある学校では、発達障害の児童が専門の先生と1対1で特別に用意された部屋で学習し、音楽や体育は自分のクラスの友達と一緒に授業を受けていた。その際にも必ずアシスタントの教員が付き添い、学級担任が一人で指導することはなく、手厚い人的配置がなされていた。

いくつかの授業を参観したが、教室の中に複数の教員がいて指導をしている姿を多く見かけた。聞くと、必ず

その教室には特別な支援を必要とする、児童がいるとのことであった。アメリカでは１クラスあたりの児童生徒数が20名前後であり、その上にこうした手厚い教員配置がなされていることを羨ましく感じた。

(6) ESL 教育

アメリカの学校では、英語を母国語としない子どものためにESLクラスが設けられている。これは英語を母国語としない子どもにも教育の機会を保障するためのクラスである。アメリカでは、全ての子どもに教育の機会を保障することが教育の指針として示されている。設置基準は州によって異なるが、イリノイ州では英語を話せない子どもが一人でもいる場合には、その学校はESLプログラムを採用することになっている。

教師は専門のESLの先生が常勤している学校もあれば、人数の関係で一人の教員が学校区のいくつかの学校を受け持っているケースもある。私が訪問した学校には日本人だけでなく、イタリア人やスペイン人、ロシア人など20名を超える子どもたちがESLのクラスで学んでいた。多様な民族からなるアメリカ、移民の国アメリカならではの手厚い教育施策であると痛感した。

(7) アメリカの公教育

最後に、アメリカの公教育についてまとめてみたい。アメリカと日本の大きな違いは、アメリカには日本の文部科学省のように教育全体を総括する機関がないことである。各州にある教育省が制定した方針や制度のガイドラインをもとに、各学区の教育委員会が学校予算の編成、教職員の採用、スクールバスの運行、校舎の建築、規則の制定などを行っている。学校行政の決定権限が地方自治体に委ねられており、地域によって教育水準に格差が生じることが、アメリカにおける公教育の大きな特徴であると言える。

つまり、アメリカではそれぞれの学校区が権限を持ち、学校区によってカリキュラムや教育内容だけでなく、教育にかける予算額も異なってくる。私が訪問した学校はいずれもアーリントンハイツ市にあり、そこは比較的裕福な人々が多く居住しており、住民の納税額も高く、そのため学校に配分される教育予算も手厚い。従って、学校設備はもとより、教育内容においてもレベルが高く、教育環境や人的配置も充実していた。財政的に厳しい学校に勤務経験があるという現地校の先生と話す機会があったが、その学校では教育予算を充分にもらえないことから、教師が授業で使用する教具一つをとっても自前で用意せざるを得なかったという話を聞かされた。少なくとも日本の公立の学校では、教育予算面でそれほどまでの学校間格差は見られない。日本の教育制度と大きく異なるところではないだろうか。

しかし、現地校の多くの先生方との交流を通して、学校教育に携わる者として日々の授業を大切にし、子どもたちの成長を見守り、伸ばそうと地道に研鑽を重ねる教師の姿勢や子どもたちに注ぐ優しく温かい眼差しは、アメリカも日本も同じであることも痛感することができた。

4．おわりに

海外日本人学校に勤務させていただくという貴重な機会をいただいたことに心から感謝している。遠く日本を離れ、海外で暮らす子どもたちの教育に携わることができ、多くを学ぶことができたことは、私にとってかけがえのないものとなった。英語教育の必要性や国際理解教育の重要性、自国や他国の文化や伝統を重んじることの大切さ等、この地で学ばせていただいたことを活かすことができるよう、これからも研鑽に努めて参りたい。

最後に、今回の派遣を通して得られた多くの貴重な出逢いに感謝するとともに、派遣に当たってお世話になった多くの皆様方に心からお礼を申し上げたい。